

平成 28 年度第 1 回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成 28 年 6 月 25 日（土）午後 2：00 時から

会 場：新潟市美術館 講堂

出席者：

（委員）会長	大倉 宏	美術評論家
	菅井甚右エ門・哲	書人
	田中 咲子	新潟大学教育学部准教授
	中山 輝也	新潟県博物館協議会副会長
	福永 治	広島市現代美術館館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	岩城 文夫	公募委員
	渡辺 千代子	公募委員

（事務局）

新潟市美術館	塩田 純一	新潟市美術館長
	加藤 正人	同 副館長
	松沢 寿重	同 主幹（学芸員）
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長（学芸員）
新潟市新津美術館	横山 秀樹	新潟市新津美術館長
	高橋 努	同 副館長
	大森 慎子	同 主幹（学芸員）

次第：

- 1 部長挨拶 新潟市文化スポーツ部長 山口 誠二
- 2 開会挨拶 新潟市美術館長 塩田 純一

3 出席者紹介

- （1）委員紹介
- （2）事務局紹介

4 議事

- （1）会長，副会長の選出
- （2）平成 27 年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業報告について

(3) その他

5 閉会挨拶

新潟市新津美術館長

横山 秀樹

1 部長挨拶

私は、この4月に異動を命ぜられ、いろいろ勉強させていただきながら、よりよい美術館運営に努めてまいりたい。

第3期の第1回目の会合で、新任の委員が5名いらっしゃる。新鮮な部分でいろいろとご意見を賜りたい。またお二人の公募委員の方からも、忌憚のないご意見をいただきたい。

本市は新潟市美術館と新津美術館という、二つの特色のある誇れる美術館を有している。それぞれ塩田館長、横山館長という、さまざまなキャリアをお持ちの館長がおり、それぞれの運営方針にしたがって特色を生かし、連携し、また市外の他の美術館とも連携しながら、市民に親しまれる美術館を目指して運営しているところである。

昨年、本市は東アジア文化都市の日本代表に選定され、中国、韓国との交流企画も行った。また、本年からは2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて全国でさまざまな文化プログラムが行われるが、本市としても、そういった取組みを積極的にやっていきたいと考えている。

本日は、平成27年度の事業報告が中心となるが、両館の運営、今後のあるべき姿、方向性について皆様から活発なご意見をいただきたい。

2 開会挨拶

この協議会は新潟市美術館と新津美術館の両館を束ねる形の協議会である。平成24年度に第1期の協議会が始まり、最初の年に、両館の運営方針を改めて見直した。両館の性格づけ、さらには両館の連携について、各委員の皆様非常に熱心にご議論いただき、承認いただいた。その方針に則って、両館とも事業を展開してきた。4年間を通じて新潟市の文化行政の中で一定の役割を果たすことができた、また、自ずと両館の個性もはっきりしてきたと思われる。

本日は、平成27年度の両館の事業報告を行う。ぜひ忌憚のないご意見を頂戴したい。

3 出席者紹介

出席委員から自己紹介。

事務局の出席者を紹介。

4 議事

(1) 会長、副会長の選出

事務局提案により、会長に中山輝也委員、副会長に菅井甚右エ門・哲委員を提案。全会一致の承認により、両委員が会長席・副会長席に着席、議事進行。

(2) 平成27年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業報告について

資料1～4とパワーポイントにより事務局から説明。

(福永委員)

一つは、新潟市美術館の「学校との連携」で、出前授業と来てもらう授業を組み合わせたという報告があったが、当館の場合なかなかそういう組み合わせが難しい。すごくいいアイデアだと思うが、出前のときに学校にどんな事前レクをしているか。

二つ目は、新津美術館の「魔法の美術館」について、観覧者が平均で1日1,284人ということは、多いときでおそらく2,000人を超した人が入っている。参加型の展覧会は、インスタクションというか導くことがすごく難しいと思うが、どのように導いたのか。

(荒井学芸係長)

以前にオープンギャラリーを実施していたときは、来館する授業だけをやっていたが、生徒が来るときにこれからどういうものを見るという話をする時間が、来館してからだとなかなか追いつかず、事前に学校へ行くということをした。

出前授業の時は、各クラス単位で1コマ授業時間をもらうのが通例だが、先生方と相談して展覧会や作品をどのように見せたいかに応じて、グループワークでアートカードを使ってゲームをやるなどのウォーミングアップをする。来館したときは、館内での約束をもう一度繰り返すくらいにして、本物と向き合う時間をなるべく長くとり、時間を有効に使っている。

(塩田館長)

少し補足する。以前はアウトリーチというか、美術館が学校に出ていく形態としては、作家に学校に出向いてもらい、そこで制作の様子を見てもらう、あるいは生徒にも制作あるいは鑑賞を体験してもらう「出前美術館」を行っていたが、それと、学校から美術館に来てもらうことが、もう一つ相互の関係ができていなかった。試行錯誤だが、両者を相互に関係づけるために、しばらくはこういう形態でやっていきたい。

(福永委員)

当館の場合、年間100校くらい来館するが、出前ではなかなか難しいところがあり、強制

的に来てもらうと、物見遊山でわあわあと、なかなか鑑賞に入っていけないところがあるのが悩みである。どういうものを持ち帰ってもらうかが大事である。先に少しレクチャーするというのはいいいアイデアだと思う。

(横山館長)

「魔法の美術館」は非常に大勢のお客様から観覧いただき、3,500 人を超える日もあった。体験型の展覧会だったため、監視員から説明役を担ってもらったことで混乱はなかった。

(田中委員)

新潟市美術館の「アートリップ」は、二度かけてやるというのは理想的だし、効果も高いと思うが、学芸員の負担は大変大きいだらうと感じた。

新津美術館は、家族連れでたくさん集客が見込めるようなものと、わりと渋いものを織り交ぜながら、少ない人数でよく回していると感じた。

新津美術館の出前授業は、アーティストなどを派遣するということだが、講師はどのような方たちか。またその効果について伺いたい。

(横山館長)

子どもたちにとって身近なテーマとして、一人はマンガ・アニメ情報館副館長の小池利春さんで、もう一人はエイキ・ミナコさんという新潟で絵本を描かれている方を講師にお願いしている。作家を派遣し、2時限分の授業の中で、作家から説明をしてもらいながら作品を制作している。

(田中委員)

そうすると、行った先の小・中学生が必ずしも、美術館にプライベートで足を運んでくれるというわけでもないのですか。

(横山館長)

出前美術館の授業を受けた子どもたちが、必ずしも新津美術館に来てほしいということではなく、よその美術館を含め、美術館に足を運んでもらえばいいと考えている。

(田中委員)

今の出前授業に関しては、美術に対して親近感を持つ子どもを育てるためだと理解した。もう一つは、両館について、昨年度の「水と土の芸術祭」で、どのようなコラボをしたか。

(塩田館長)

昨年度の水土はメイン会場が二葉中学校で、その行き帰りで寄ってもらおうと、西大畑界限の当館を含めて砂丘館、齋藤別邸のあたりをツアーするプログラムを組んだ。ただ、「ラファエル前派展」をかなり前から予定していたため、水土の作品を当館で展示するというよ

うな連携はとれなかった。

(横山館長)

昨年の水と土の芸術祭土のテーマが「渦」だったため、当館はそのテーマに該当せず、コラボする企画はしていない。ただ、第1回目の芸術祭の作品が前庭にあるので、企画展の観覧者や水と土の芸術祭の作品を巡っている方がご覧になっていた。

(降旗委員)

3期目ということで、徐々にいい形に発展しているなど、事業報告を聞いて改めて感じた。特に、新潟市美術館の研究、工夫、バランスを考えた企画、新津美術館の、独自のユニークな企画、そういう美術館としての住み分けが非常にうまくいっていると思う。また、美術館の企画展を補完するいろいろな教育普及活動も大変熱心にきめ細かくやっていると感じた。

この先の事業の展開として、教育普及のほうで、子ども、親を含めて美術の表現の基本となるところを育てていく活動もぜひやっていただきたい。当館も来年30周年を迎えるが、最初に行っていたワークショップの子どもたちがみんな大きくなり、今では何人かまとまって講師をやってくれている。目黒区美術館は学芸員の人数が少なく大変な状況だが、教育普及活動については卒業生たちが一生懸命サポートしてくれている。手を掛ければ掛けるだけのことが返ってくるというのを感じている。子どもたちの新しい感性をもっと拓いていくワークショップ、教育普及活動もやっていただきたい。

普及活動には、版画とか、絵を描くとか、技術を磨いていく美術館ならではの活動というのがある。いろいろな子どもたちを入れていかなければいけないので、広く面白い、だれでも参加できるということも必要である。そのほかに、もっと感性を拓いていく、例えば住むというのはどういうことかとか、色はどういうところから生まれてきているかとか、そういった根本的になるような活動をぜひこれから広げて行っていただきたいと思う。

(塩田館長)

美術館活動は多岐にわたっていて、かつては展覧会を企画していい作品を見ていただくことが美術館の大きな目的だったが、1980年代くらいから教育普及ということが非常に重要であるということで、降旗さんの目黒区美術館などは、そういう動きのパイオニアとしてやっておられるので、その経験をぜひ私たちも学んでいきたいと思っている。

感性を拓いていく、創造的な活動を扱っていくという、美術館にとって非常に重要な最も基本となる部分を、教育普及事業として考えたとき、たぶん降旗さんがおっしゃったことに行き着くだろうと思う。当館がその部分の実現できているか非常に心許ないが、昨年度の「アナタにツナガル展」の折元立身さんのパン人間のパフォーマンスでも、表現の最も基本

となる部分を大勢のお客様に見ていただいた。それがどこか、降旗さんがおっしゃったことと通じていくようなことかと思う。それを教育普及のプログラムの中でどう実現していくかは、我々スタッフの力量や経験を培いつつ、少しでもそういう方向に近づくように努力していきたい。

(菅井委員)

私も上京して展覧会を見に行こうと新聞を見るが、主催によっても違うが、行こうとする気持ちはどこから出てくるのだろうかと思う。美術館はただ、おいでくださいだけでなく、こうやって一生懸命資料を作ったり、あちこち気をつけているのだが、お金の問題が先に出てくるわけです。どうしてもやらなければならないものというか、新潟市美術館の場合も、私があちこち人の話を聞くと、舟越桂さんの彫刻の展覧会は非常に良かったと。前からマスコミをうまく使っているのだが、中でも新聞社は展覧会に行ってみて活字にするというのが少ない気がする。しつこくこちらからお願いしないと、別のところへ吹っ飛んでいく気がするので、そういう努力を美術館にもう少ししてもらいたいと思う。

新津美術館と新潟市美術館の企画が異なった方法で、これはかえっていいのではないかという気がする。ただ交通の便がどうだとかということを出すと、これはもうどうしようもないので、行きたければタクシーに乗ってでも行くと思うし、その辺をマスコミにもう少しおどしをかけるくらいにやっていただけたらと思う。

(大倉委員)

新津美術館と新潟市美術館のすみ分けというか、展示内容の個性がかなりはっきりしてきて、それがいろいろな形で見る側にも感じられるようになってきたと思う。

去年は新津美術館には行けなかったが、収益率 201 パーセントや 215 パーセントの展覧会があり、14 万人を超える人が来ている。私が美術館で学芸員をしていたころは、人をたくさん入れろと言われていたが、そういう意味では新津美術館はとてもすばらしい数字を出している。

昨年、新潟市美術館の展覧会を全部見たが、とてもよかったと思う。特に「川村清雄展」、「アナタにツナガル展」は、人数が少なく収益率も 15 パーセントから 26 パーセントと、たぶん行政から見るとこの数字は好印象を与えないかもしれないが、私は見る人間としてとてもよかったと思った。内容も素晴らしいが、「アナタにツナガル」は、美術館の人が自分で考えて作家を選び、会場構成も作家とともにいろいろ試行錯誤しながらつくったという会場で、評価はさまざまかもしれないが、発想がとてもよかったと思う。「川村清雄展」も、学

芸員の思い入れの深い展示やカタログも含め、いい対応だったと思う。特に「アナタにツナガル」は、角地さんという新潟在住の方の、自身も写真を撮りながら、施設に入っている写真を撮る方と一緒に何かをしてきた方だが、そういう方を取り上げて展示コーナーをつくったことはとてもいいと思った。

新津美術館は地元に着目ということで「地域の隠れた名品展」をされている。「アナタにツナガル」展では、今、新潟というエリアで活動している人に焦点を当てたところが素晴らしい。昨年の「ニイガタ・クリエーション」は新潟出身の人で、新潟で活動していない人が多かったのが残念だったが、今回、そういう方に美術館が独自の視点で光を当てて会場で紹介したということをお高く評価したい。これは逆に新津美術館ではできない企画だったと思う。こういう数字かもしれないが、美術館にとって大事だと思うので、こういう企画展はぜひ続けていただきたい。行政の方にも認識してもらおうように私も働きかけたいと思うので、頑張ってもらいたい。

いろいろな施設との連携が盛んになってきて、大変だと思うが、先ほどの出前授業で、新潟市美術館のほうで作家ではなく学芸員が行くというのはとてもいいことだと思った。作家とのふれあいも非常に大事だと思う。特にアーティストと言われている人は人間的に非常に独自の魅力を持っているので、子どものときにそういう人と出会うことは大きな体験だと思う。

私が代表をしている新潟絵屋というNPO法人の画廊では、最近、新潟市こども創造センターとよく協力している。こども創造センターは子どもが自然に集まってくる場所で、非常にいいスペースがあって、いろいろなものが揃っているが、うちの画廊で展示をしてもらった作家がそこへ行って、子どもたちと一緒にいろいろなワークショップを何回かしたのが非常に好評だった。美術館も、学校だけでなく、そういった施設とも連携すると、学芸員の負担も少なく、いい作家と子どもたちが出会えるのではないかと思った。

(岩城委員)

私が高校1年生の夏休みに、美術の授業で、新潟で大原美術館展が開催されたので見に行けという宿題が出た。このときは美術館はなく、結局、県民会館だったと思う。あのころの新潟は文化果つる地だという話もあったが、それから比べると非常に天地の差で、皆さんいろいろ活動していて非常に感心した。新潟市美術館は集客という面でははっきりいって気の毒だ。あの駐車スペースもどうにもならないし、集客という点ではなかなか大変だろうと、同情申し上げる。

学校教育で先ほどからいろいろご意見が出ているが、ゆとり教育で美術の授業が減り、学

校の文化祭に行っても絵の展示はせいぜい1点で、過去と比べると全然違う。質においても違い、寂しい展示になっている。かつてはどの中学にも美術部があったが、少子化の今は運動部も減って、美術部もかなり潰れている。あとはアニメを描いて終わりみたいなのところもあって、美術好きの子はどうしているのだろうかという素朴な感想を持っている。美術館としても何か救えるような手があったら、さらにいいと思う。

昨年私は「坂井輪学」という西区坂井輪地区の歴史の講座に参加したが、私みたいな中高年が大勢来ていた。元気な定年世代というのはけっこういる。子どもたちも大切だが、こういう年代を何とかすくい取れないだろうか。

最後に、今、新潟市からの美術館への予算はどうか。減る傾向なのか、それとも少し増える傾向なのか、お聞きしたい。

(加藤副館長)

市のほかの予算もなかなか厳しい中、美術館の予算も減っているのは事実で、財源の確保が厳しく求められている。両館の収益率の数字を見ると、新潟市美術館は数字的にだいぶ厳しいので、今後さらに多くの方から見に来てもらえるよう努力していかなければならない。

(中山会長)

ここで皆様の意見をまとめたい。まず、出前授業はその館のためだけではなく、美術の底辺を広げるためのものだと思うので、横山館長の考えは非常にいいと思う。移動時間ももったいないという話も大事な要素ではないか。リピーターについても、その館に対するリピーターでなくても、どこでもいいと思う。

私は一度だけ目黒区美術館に行ったことがあるので、降旗さんのおっしゃったことはだいたい分かる。建物から感じて、ああいうやり方はよろしいのではないかと思う。

菅井さんがおっしゃった、行くという動機について。やはり新潟市美術館と新津美術館は非常にすみ分けが、最初はどうなるのかと思ったのだが、今、すみ分け方がすごい。

大倉さんが言ったように収益率だけを考えていたらこの商売は成り立たない。収益率が悪いものがあったとしても仕方がない。そういう意味の普及啓発があると思う。そういうことはある程度、行政にも知ってもらいたいと思う。

岩城さんがおっしゃった、好きな人がだんだん学べなくなるのではないかと。美術の時間が少なくなっているということは事実で、教員の中に本物がないときがある。掛け持ちでやっているので、レベルが上がるわけではない。そういった中で、底辺を上げる環境をつくるのがまず第一ではないかと思う。

予算の話も出た。今、減っているというのが、現市長は芸術には理解があるので、芸術関係

は極端に減らしたりしないと思う。

(渡辺委員)

皆さんの話にいちいち納得した。新潟市美術館と新津美術館の違いもよく分かったし、子どもたちのための出前授業もいいことだと思った。大人もだが、ゆとりが取れない状況が子どもは深刻であると常々感じている。それは美術関係だけではなく、いろいろな分野に及んでいる気がする。

美術関係のいい企画があるから行ってみようかとか、まずは広報が一番大事だと思う。企画も大事だが、広報を大々的に、どのような出し方をするかによっても違ってくと思う。

美術の重要性、癒しを今の子どもたちに教えていただきたい。それができないと、いじめにつながったり、いろいろな事件・事故にもつながったりが予想される。美術関係の皆さんに力をいただき、お金を使っても子どもを引っ張って行こうとか、子どもに引っ張られて親が行くとか、そういういい企画を出していただきたい。

事業として収益につながるにはどうすればいいか。新津美術館の近くの植物園は場所も広く、ゆったりとした気持ちで、美術を見た後の親子の会話が広がり、それが美術だけではなく広がっていくのを痛感する。また、植物園に1日無料デーというのがあり、その日をねらって行って、行った人がよかったよということになれば、お金が多少でも発生するのではないかと思う。まず取っ掛かりだと思うので、ぜひよろしくお願したい。

(中山会長)

よい企画、PRを上手にやっていくということだと思う。人間関係をきちんとつくる中でもよい美術が必要であるということだと思う。

(福永委員)

新しい収蔵品の説明があったが、それぞれの館の収集の傾向と成果を、作品の名前だけではなく、少し交えて説明すると分かりやすいのではないかと思う。

新潟市美術館の、大岩オスカルさんの管理換についても事情を教えてください。

(塩田館長)

新潟市美術館の購入作品は、当館が開催した企画展で展示した作品、展示した作家の作品である。美術館の収集活動というのは展覧会活動、企画展と連動した形で展開されるべきだろうと私は考えている。

寄贈作品は、新潟県出身の木村希八さんという版画の刷り師の方がおり、以前にもかなり

まとまって寄贈を受けているが、木村さんが一昨年亡くなり財産の遺贈という形で、木村さんの版画工房で制作した作品、木村さん自身の作品、木村さんがコレクションしていた作品の3種類の中から選ばせていただいた。

大岩オスカルさんについては、第1回の「水と土の芸術祭」のときに展示された作品を市で寄贈を受けた形になっていた。私も大岩さんとは昔からお付き合いがあるが、やはり美術館で持ってほしいということもあり、管理換をして当館で受け入れた。

(横山館長)

新津美術館の購入予算は新潟市の収集予算のうちの4分の1となっている。基本的に新潟県出身作家の作品を収集しており、当館で開催した展覧会に出品した作家の作品も購入するなどしている。玉川宣夫さんと三浦小平二さんは工芸、岩田正巳さんは日本画で、昨年度は計4点を購入した。特に玉川さんと三浦さんは、新潟市美術館も含めて新潟市の収蔵品の中に工芸作品が非常に少ない状態なので、当館で収集していきたいという意味もある。

寄贈作品については、新潟県関係の作家の作品も寄贈いただいているが、当館で開催した展覧会を見たご遺族の方が連絡をくださりぜひ寄贈したいというお話をいただいたので、県外作家の作品も収集した。全体的にはまだまだ収蔵作品は少ないので、これから収集していきたい。

(菅井委員)

学芸員が、勉強という言葉は悪いが、外へ出て来るのは年間にどのくらいあるか。少ないような気がする。まずそのところへ行くというのが大事だと思うが、たぶん出張とか、そういうものでお金が絡まるから大変なのだろうとは思いますが、館長はじめ、そういうところにまず行くと。これはもちろん予算か何かでお願いをしているのか。どここの展覧会というだけではなくて、勉強に。日本だけでなくもいいが。

(横山館長)

学芸員が勉強として展覧会を見に行くための旅費は出ない。個人的に休みを利用して個人の負担で行っている現状である。個々の学芸員がどこまで勉強するかということにもかかってくる。

(大倉委員)

先ほど子どもたち、定年後の人たちをいかに呼び込むかという話があったが、もう一つはやはり学生との関係が大事かと思う。実は私たちの砂丘館もなかなか学生が来ないという現状がある。新潟大学の田中先生がいらっしゃるが、新潟大学は今いろいろと激動の時代で、

ゼロ免の廃止で教育学部の中にだけ美術科が残るという状態になっているが、その学生たちが、学生のときに美術館にたくさん来るのと来ないのでは、そのあとのことも随分違うと思う。私が上野の学校に行っていたとき、研究室に必ず東京国立博物館の招待券がたくさんあり、しょっちゅう招待券で行っていた。学生は本当にお金がないので、美術館の1,000円に、さらに新潟大学はバス代だけで往復1,000円以上かかるのでなかなか大変だ。今、美術関係の専門学校も新潟市内にあるので、そういう学生にもう少し来てもらうように招待券を研究室に置くというのも一つの方法である。ほかにも学生が来やすいような方策を今後考えるとよいと思った。

(横山館長)

私は新潟大学で教えているので、大倉委員が言ったことを学生たちに聞いてみたことがある。博物館施設の中でどこに行くかと聞いたところ、やはり水族館が多かった。美術館に行きたいという学生はごく少数で、今までどれくらい美術館に行ったことがあるか尋ねると、数回くらいがいいところだった。行かない理由としては交通費がかかるのということや展覧会の観覧料をもっと安くできないかという意見だった。学生たちが金銭面で来にくい状況であるのは確かだと思う。

(田中委員)

学生が行かないのは私も悪いなと思っている。学生がどうやったら行くかというのを、今日発言しなければいけないかなと考えながら躊躇していた。都内や私が以前いた名古屋だと、特に私立だと思うが、美術館と大学が連携して、大学が年間会費を払うと学生証だけで入館できるという制度を導入していた。新潟大学がそうものを出すとはあまり現実味がないが、そういう組織的な連携の仕方もあるのではないかと思った。

(塩田館長)

私は東京都にいたのだが、東京都の財団が大学との連携で、大学で数十万払っていただくと東京都の五つの美術館が無料で入れるということをやっていたが、とはいえ都内であっても、美術館のある都心部からすると美大などは八王子、町田といった周辺部にあるので、都心に行くだけでも電車賃がかかってしまい、なかなか足を運んで見に行くという形にならない。例えば新潟市美術館に来ていただくお客様は圧倒的に中高年の方が多い。しかし、「草間彌生展」をやったときに新潟にこれほど若い人がいたのかというくらい若いお客様が来た。なぜかという草間さんがそれだけメディアを通じて流通しているということかと思う。若い人たちもそうだが、自分の目で物を見ているのかというと、やはりメディアを通じて、メディアで流通しているものを確認していただけないかという気もしている。自分の目で見て自分で物を考えるということ、大学のほうにも頑張っていたいただきたいと思う。

6 閉会挨拶

(横山館長)

委員の皆様方には熱心なご審議をいただき、また貴重なご意見をいただきお礼を申し上げます。新潟市美術館、新津美術館とも本日のご意見を参考にさせていただき、これからの美術館運営に取り入れていきたい。